
IS-戦いを求めるもの

志祈月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 戦いを求めるもの

【Nコード】

N3918X

【作者名】

志祈月織

【あらすじ】

戦いが好きだ。戦って、戦って、戦いあいの末に、戦いたい。だから、あの日出会った彼女はまさに運命だった。俺より強く、凛々しく、美しい。俺は、彼女に勝つために銃を取り、技を磨き、戦略を学び、すべてをかけて戦った。直向に彼女を求め、それはいつしか愛情となった。

ISで主人公の二次創作です。一夏の幼馴染という設定です。テンプレ、ハーレム要素、最強、ご都合主義を含むのでご注意ください

さい。

途中で更新が停止したらごめんなさい。

再会と再開（前書き）

投稿するのが初めてなので不備があれば教えてください。
あと、感想はどんどん募集しております

再会と再開

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」

そう、につこりと微笑むのはこのクラスの副担任、山田真耶だ。

高校一年生である俺と同じか、それよりも幼く見える彼女は、まるで子供が大人のマネをしていますよ、といった風に教室を見回す。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いします」

どちらかといえば、こちらがよろしくする側ではないだろうか。

と山田先生の姿にそう考えてしまう。

教室中が俺と同じ考えなのか、それとも別の理由からだろうか。

クラスの誰も反応を返さない。

おそらく、二対八くらいで後者の割合が多いだろう。

「え、えつと……。じゃ、じゃあ自己紹介をしましょうか。出席番号順をお願いします」

その場の沈黙に耐えられなくなったのか。山田先生はうるたえながらそう告げた。

まったくもって、教師に思えない。

まあそれはそれでおもしろい。それに、その小動物を思わせる姿は年不相応にかわいい。これは、年齢より幼いという意味だ。

もっとも、俺よりも前方。クラスの真ん中最前列というお誕生日席に座る友人、織斑一夏はそんなことないらしく、引きつった顔で居心地悪そうに座っている。

ちらりと、幼馴染である篠ノ之箒に助けを求めるが、無視される。それにいつそ落ち込む一夏だが、まあ無視された理由には思い至ってないだろう。

まあ、俺個人としてはおもしろいから問題はない。だいたい、一夏もだらしがない。せっかくこんなおもしろい状況に置かれたのだ。少しは楽しめばいいものを。

と教室中を軽く見回すが、俺と一夏以外の生徒は女子ばかり。そ

れだけではなく、この学校すべてを見ても、男子は俺と一夏だけ。他はすべて女子なのだ。

こんなハーレム状況。楽しむな、というほうが無理な話だ。

「……あの、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

山田先生の声に、一夏は声を裏返しながら答えた。

どうせ、現実逃避でもしていたのだろう。

「あ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな?」

とひたすらに頭を下げる山田先生。うむ、教師とはとても思えない。まるで一夏にいじめられて謝っているみたいだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても。自己紹介ですよ。します、しますから……」

なんとか山田先生をなだめる一夏。これじゃ、どっちが年上だかわからないな。

一夏は立ち上がると、こちらを振り向いた。

「え、えっと。織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう、当たり前障りのない無難なあいさつから始めるのだった。

振り返れば俺たちがここ、IS学園にいるのは一夏が原因だろう。本来、俺たちは私立藍越学園に入学するはずだった。

俺としては高校などどこでもよかったのだが、一夏がそこを受験するといったので、俺もそこにしただけだ。深い理由などない。

なので受験会場やその他諸々などは特別調べることもなく、すべてを一夏に任せて受験会場へと向かった。

そこで運がいいのか悪いのか、一夏と俺はISを起動させてしまったのだ。

インフィニット・ストラトス。通称、IS。

簡単に言えば、この世で最強の兵器だろう。まあ、それに色々異

論はあるのだが、世間一般の評価といえばそんなもんだ。ついでに、女性しか起動できないといわれていた。

そう、過去形だ。俺と一夏がISを起動させたことでその常識は壊された。

その事実は世間や国、つまるところ世界を大きく震撼させた。

俺たちはそのなんだかんだといったゴタゴタの中、本人たちもよく知らないさまじな思惑があり、その結果としてこのIS学園に入学させられたのだ。

すごい大雑把な回想を終える、一夏はまだ立っていた。先ほどからなにもいっていない。

教室中が一夏に注目をする。期待が高まる中一夏は、「以上です」

何人ががずっこけた。俺としてはまあ、予想通り。あいつがこの空気の中、おもしろいことをいうことなどできない、という程度には幼馴染であるあいつのことを理解している。

バアンツ！

突然響いたその音。それは、いつの間にか教室にいた人物が、一夏を出席簿で叩いた音だった。

「げえっ、関羽!?!」

バアンツ!と二撃目。すばらしい一撃だ。惚れ惚れする。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

はたして、その人物は誰かというと、なんてことはない。織斑千冬、一夏の姉だ。このクラスの担任になることは聞いていたが、遅かったな。

「あ、織斑先生。もう会議は終わりましたんですか?」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」
どうも、遅れたのはそういう理由らしい。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいしないと……」

先ほどより熱っぽく話す山田先生。

なるほど、この先生も千冬の信者かなにかか。

千冬は世界中のIS乗りの憧れで理想だ。山田先生のような反応をする人は初めてではない。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てる二が仕事だ。私のいうことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を一六才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私のいうことは聞けないな」

いきなりの暴力宣言。教師というより、前にやっていた軍の教官に近いな。

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「私、千冬様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

とこんな感じだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるか？」

本気でうつとうしがる千冬。そんなことなど気にも留めず、

「きゃあああああつ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡けて！」

このクラスはDMの集まりらしい。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は……」

バアンツ！と三度出席簿が振り下ろされる。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

とこんなやりとりすをすれば、教室には二人が姉弟だとバレるのは当然。

「え……？ 織斑くんって。あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で一人目の男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ないよ。一夏も俺も、ISが使える原因は不明とされてるが、俺は大体の予想はついている。おそらく、千冬もだ。一夏は、まあ気づいてないな。」

「あと、どいつもこいつも千冬に幻想持ちすぎ。一度、家でのぐうたら具合を見せてやりたい。」

「おい、そこでニヤついている馬鹿者」

「……俺か？」

「どうも、表情が表に出ていたようだ。別に隠す気もないけど。」

「そうだ。ついでにお前も自己紹介をしろ。いっておくが、マジメにやれよ」

その千冬の目は、ふざけたらどうなるかということ物語っている。さすが、千冬。俺のことをよくわかってる。俺がこの状況で、どういう行動をとるかということはお見通しというわけだ。

「なら、その期待に応えるでしょう。」

「みなさん、はじめまして。師河美鶴です。一夏と同じく、男ですがよろしく願います」

教室中の視線が、俺に集中する。うん、悪くない。

「好きなものは女の子。趣味は女の子をナンパすること。将来の目標はハーレム建造です。叱って罵って優しくして羨けて欲しい人は、俺に一声かけてください」

一瞬の沈黙。そして、

「キヤー！！ 肉食系よ、肉食系男子だわ！！」

「すごい、かっこいい。羨けて欲しい！」

「あの、今晩暇ですか！？」

などと教室から歓喜の悲鳴が上がった。今更だが、この教室にはバカしかいないのではないだろうか？

そんな中、千冬は静かに俺の席まで歩いてくると、

「マジメにやれといっただろうが、馬鹿者！」
出席簿を振り下ろした。

俺としてはこうなるだろうことはもちろん予想していたので、身を捻りそれを避ける。

「……避けるな」

「だって、当たったら痛そうじゃん」

現に、風圧だけで前髪が少し切れた。一夏へのものより、明らかに殺傷力が高い。

「……ふん」

もう一撃。俺はそれを机の上にあつた入学案内書を丸め、筒状にして受け止める。

「おいおい、危ないな。なに怒ってるんだよ？」

「教師として、生徒が不真面目な態度を取ったら指導するのは当然だ」

「体罰だろ、これ」

「訴えられなければ問題ない」

と会話する間も、出席簿と筒で打ち合う。

やばいな、強度的にこつちが負けそうだ。

「う、うそ。千冬様と互角に戦っている？」

「何者なの？」

そんな声も無視。そんなことよりも、今は千冬に集中する。千冬だけを、見つめる。

「ニヤニヤするな、馬鹿者が！」

それは無理だ。こんな楽しいのに、笑みを抑えるなんてできない。
ない。

互いに、速度を増していく。そして、

「……時間切れか」

「それは残念だ」

鳴り響くチャイムの音で終わりを迎えた。

ダメだ、不完全燃焼過ぎる。こんなんじゃ、ぜんぜん満足できない

いな。

「さて、これでSHRは終わりだ、師河、座れ」

「おいおい、冗談じゃないぜ。お楽しみはこれからだろう。千冬だつて、まだ満足してないんだろう？」

「織斑先生だ。もう一度だけだ。座れ」

有無を言わせぬ千冬の口調。それに、俺も幾分か冷静さを取り戻す。

俺は大きく息を吐き、頭を冷やす。つたく、俺としたことが。高校生活初日ということで、気が大きくなっていたようだ。これだから、両親からはまだ子供扱いをされるのだろう。

「っとまあ、このように腕にも少し自信があります。みなさん、これからよろしくお願いします」

そう締めくくり、俺は座るのだった。

挑むものと立ち向かうもの（前書き）

セシリアの性格がかなり改変されていると思います
そついうのが嫌いな方は気をつけてください

挑むものと立ち向かうもの

そんなこんなで休み時間。この学園は始業式だというのにいきなり授業がある。まったくもってめんどくさい。

そして廊下。俺と一夏を見物に、学校中から生徒が集められているようだ。当たり前だが、全員女子。

「落ち着かない」

そう零すのは一夏。俺は一夏の机に座り、答える。

「なにが？」

「なにが、じゃねえよ。見るよ、廊下」

俺は廊下に笑顔で手を振ってやる。そして響き渡る歓声。

「うん、みんなかわいいな」

「なんでお前はそんなに余裕なんだよ……」

疲れたように、うなだれる一夏。

「おいおい、だらしがないな。一夏も男なら少しはこのハーレムを楽しめよ。あれだ、適当に女の子に声かけて飯でも誘うとかさ」

「出来るか、そんなこと！」

だらしがないやつめ。そうやって女子に近づこうとしないからいつまでも女心が読めない鈍感野郎なんだ。

「……ちよつといいか」

「え？」

「ん？」

突然、声をかけられた。さてさて、この衆目の中思い切った行動をするな。

「……箒？」

「よっ、久しぶり」

その正体は、六年ぶりに会う幼馴染、篠乃野箒だった。不機嫌そうな顔の幼馴染にまずは一言。

「元気してたか？ 相変わらず景気悪そうな顔だな」

「余計なお世話だ！　というか、なんでそんなに軽いんだ、お前は」
なんでもなにも、幼馴染に対して硬くなる必要もないだろう。それに、筈のお目当ては俺じゃないんだし。

「一夏、話がある。いいか？」

「俺だけ？　美鶴には？」

「相変わらずの鈍感さ。ここは手助けしてやるう。」

「その、美鶴は、だな……」

「俺は少し用事があるんだよ。お前だけでいって来い。筈、また後で話そうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

俺は立ち上がり、二人を廊下を送り出す。まっ、どうせ当たり障りのない会話で終わりだろう。一夏の鈍感さもさることながら、筈も案外ヘタレだからな。

「それで、何か御用ですか。お嬢様？」

「ええ、もちろん。ちよつと、よろしいかしら？」

振り返ると、そこには金髪美少女が立っていた。気の強そうな瞳で、俺を見ている。

「もちろん。俺は女性のお誘いは断らない主義なんですよ」

「相変わらずの八方美人ですわね。いつか背中から刺されますわよ」

「それは怖い。せいぜい、気をつけるとしましょう」

そう、俺はにこやかに笑った。

「あと、いい加減その他人行儀な話し方はやめてくださるかしら。

不快ですわ」

「はっ、最初に言葉使いに気をつけるっていったのはそっちだろ。お嬢様」

俺はがらりと口調を変える。別に、下手に出る理由もないし。

「そのお嬢様、というのはやめてくださるかしら。わたくしにはセシリア・オルコットという名前があるのです」

知っているよ。イギリスの代表候補生で専用機持ち。今年の一年生の中でも指折りのエリートだ。そして、俺の顔見知り。

「ははっ。元気そうだなによりだな、お嬢様。それに、予想通り美人になった。俺の女を見る目は確かだったか」

「お褒めにいただいて光栄です。あなたに認めてもらうため、研鑽を積みましたから」

「ああ、代表候補生になったんだろ。おめでとう、お嬢様」

「そう思うなら、いい加減に名前で呼んでくださいますか」

名前で呼ぶ、というのは昔交わした約束のことだ。お嬢様が、俺を惚れさせるくらいイイ女になったら名前と呼ぶというものだ。なぜそんな約束をしたかというと、過程は色々あるが、結論としてはお嬢様が俺に惚れたから。それを俺が拒否したから。

うん、なんて自分勝手なんだ俺。昔は若かったな。今も若いけど。「さて、どうしようかな」

挑発的な笑みを浮かべる俺。もちろん、俺はそんなに惚れっぽくない。いや、女の子は好きだけどね。惚れるか惚れないかは別なんだよ。

うん、実に最低だ、俺。

そこで、授業開始のチャイムが響いた。

「さて、授業だ。席に戻ろうぜ。いつまでもここにいたら邪魔だ」

「そうですね。でも、私は簡単にはあきらめませんわよ」

「もちろん。そうじゃないと張り合いがない」

お嬢様は席に戻っていった。

あの口調。どうやらお嬢様はよほど自分に自信があるんだろう。

どんなことをしてくるか、実に楽しみだ。

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

記念すべき初授業。といっても、まだ初日だ。入学前にもらっていた参考書の内容を理解していればそう難しいこともない。理解していれば、だ。

「ほとんど全部わかりません」

やけに自信満々に、醜態を晒すバカが一人いた。もちろん、一夏だ。

「ぜ、全部、ですか……？」

さすがの山田先生も、顔が引きつっている。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

そんなやつは、もちろんいない。

「えっと、師河くん？」

「なんですか？」

「師河くんは、大丈夫ですか？」

「もちろんです。入学前にもらった参考書は理解できていますから。この程度は問題ありません」

「なつ、美鶴!？」

驚いたように、こちらを振り向く一夏。

「なんだ、一夏？」

「お前、勉強なんてしてたのか？ 毎日俺と一緒にだっただろう？」

その言葉に、教室がざわめく。おい、誤解を生むような言葉をいうな。俺に男の趣味はない。

「当たり前だ。ここは選ばれた人間しか入れないエリート校だぞ。ある程度の事前学習しておくのは当然だ」

半分うそ。俺はISの知識なら勉強しなくてもある程度は把握している。少なくとも、この学校で三年間で学ぶ知識程度は。

「なんで教えてくれなかつたんだよ!？」

「教えるまでもなく、当然だと思ったからだ」

「本音は？」

「おもしろそうだったから」

「ふざけるな!」

「こっちのセリフだ」

これで何回目か。千冬が出席簿を振るった。

「まったく、恥を晒すな。大体、必読と書いてあっただろう」

「でも、千冬姉」

「織斑先生だ」

同じく、一撃。ああ、痛そうだな。

「それで、肝心の参考書はどうしたんだ？」

「……破いた」

「なに？」

「握力がどれだけあるか試そうと思ったんだけどさ。古い電話帳使おうと思ったら、間違えて……」

「馬鹿者」

そして、もう一度バアンツ。

「あとで再発行してやるから一週間以内で覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれといっている」

「……はい。やります」

「がんばれよ」

「お前も、場を乱す発言をするんじゃない！」

しょうがないじゃん。

だって、好きな子ほだからかいたくなるんだよ。なあ、千冬。

次の休み時間は、篤と一夏、俺の三人で会話した。一夏は怒っていたが、まあどうでもいいか。俺だって少しは反省してるんだぞ。

だから休み時間をこうやって幼馴染三人で話すことで、回りの目が気にならないようにしてやってるんじゃないか。

本音は、一夏と話す篤の反応を見るのが面白かったから。

それで、授業開始。今度は、千冬が教壇に立つようだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者か。聞くからにめんどくさそうな名称だ。まあ、内容を聞けばまったくその通り。クラス長とかそんな感じの役職らし

い。

「はい、織斑くんがいいと思います！」

「私もそれがいいと思います！」

次々とあがるのは一夏の名前。どうせ千冬の弟だからって理由だろう。俺としては、俺じゃなければかまわない。そんなめんどくさい役職になれば、自分の時間がなくなるからな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

さて、無事に一夏に決まりそうだ。

「師河美鶴さんを推薦します」

俺の思いとは裏腹に、余計なことをいうやつがいた。だれだよ？

「お前は、オルコットか」

「はい、そうです」

席から立ち上がったお嬢様だった。さっきの休み時間はなにもしてこなかったから忘れてたが、なにかを企んでるな？

「そうね、確かに師河くんもいいわね」

「さっき千冬さまと互角だったんだもの。きつとISの操縦も一流」
「よ」

やばい、めんどくさくなりそうだぞ。

「まった。俺はパスだぞ。いいか、よく考える。俺がクラス代表になつたら、女の子と遊ぶ時間がなくなるだろ」

「それがどうした？ それに、推薦された以上拒否権はない」

くそ、聞く耳もたない。まあ、俺の理由を聞けば当然か。さて、どうする。

「織斑先生。よろしいですか？」

「まだなにかあるのか、オルコット」

「はい。わたくし、セシリア・オルコットは自分をクラス代表とし

て推薦します」

「ほう、どういうつもりだ？ 他薦をしながら自薦とは」

「わたくしはクラス代表には実力トップがなるべきだと考えています。そして、現在このクラスでのトップはイギリス代表候補生であるわたくしだと自負しています」

これは純然たる事実だ。他の生徒など、お嬢様に手も足も出ないだろう。

「しかし、それと同時にわたくしはより強い人物を知っています。それが、美鶴さんです」

千冬が俺を見た。なにかいいたいって顔だな。

「……それで、なにがいいたい？」

「つまり……」

「どっちが強いか、決めようぜってことだろう？」

俺は立ち上がると、お嬢様を見返した。くそ、おもしろいな。

「なるほど、確かに簡単でわかりやすく確実だ。お嬢様が俺に勝てるってんなら、それこそ惚れちまうだろうな」

「ええ、そうです。こうなれば、あなたも断れませんかでしょう？」

「ずいぶん大胆だな。こんなことしなくても、お嬢様のお誘いなら俺は断つたりしないのに」

「それは、わたくしの覚悟の表れだろ思ってください」

お嬢様は笑い、俺も笑った。互いに誘うように、挑発するように。「それで、一夏はどうするんだ？ 別に逃げてもいいけど、俺とマジで戦える機会なんてそうそうないぜ」

事の成り行きを静観していた一夏に、声をかける。

「あら、織斑さんもですか？」

「あいつは俺の弟子みたいなもんだ。甘く見ると、痛い目見るぜ」
「なるほど、それはおもしろそうですね」

で、肝心の一夏はどうするんだ。

「俺もやる。俺がどれくらい強くなったか、美鶴に見せてやる」

「……ってことでどうだ。千冬」

「織斑先生だ。馬鹿者」

注意はするが、今度は出席簿はなしだ。さすがに俺たちの空気を
読んだのかもしれない。

「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリー
ナで行う。初戦は織斑とオルコット。その勝者が師河と勝負だ。異
論はないな」

「ない」

「ありませんわ」

「俺、一試合だけかよ。まあ、いいぜ」

さてさて、楽しくなりそうだ。

挑むものと立ち向かうもの（後書き）

更新の頻度は遅いと思いますが少しずつがんばりたいと思います

変わらない者たち(前書き)

サブタイトルを考えるのが大変です

変わらない者たち

「ああ、織斑くん、師河くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

放課後の教室。俺と一夏が互いに本日のことを振り返っていると山田先生がやってきた。

本日の出来事？ 女の子と一緒に昼食食べた、以上。一夏はぐったりとしているが、俺は楽しい一日だったと思うよ。

「山田先生、なにか御用ですか？」

「えつとですね、寮の部屋が決まったからお知らせにきました」
部屋番号が書かれた紙とキーを差し出す山田先生。

はて、寮とな？ 確かにこの学園は全寮制だが、しばらくは自宅通学ではなかっただろうか。

「あの、俺たちって一週間は自宅から通学じゃないんですか？」
同じことを一夏も思ったらしい。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理やり変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

ああ、なるほどね。自宅にいたらマスコミやら学者やらがうるさいってことか。一夏も春休み中はそれで苦労して、俺の家に避難してきたっけ。ちなみに、我が家は俺のお母様がすべて撃退したし、その後は押しかけることもなくなった。

きつと、昔のコネでも使ったのだろう。

「そういう訳で、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。あいにく、個室が一つと相部屋が一つしか用意できなかったなので、どちらかは相部屋になってもらいますが」

「一夏、相部屋な」

「なんでだよ!？」

「俺が相部屋になったら、女の子を部屋に呼べないだろう」

なに当たり前のことを。

「ふ、不純異性交遊はダメですよっ」

「大丈夫、俺は本気で女の子と遊ぶだけですから」

それに、もう経験はしてるし。

「なにが大丈夫なんだ、馬鹿者」

鋭い殺気。俺は身を屈めると、今まで首があった場所を鋭いなにかが通り過ぎた。

「おい、首と体が永遠にバイバイするところだったぞ」

「そうか。惜しかったな」

当たり前だが、千冬だった。

「どっちみち一ヶ月もすれば部屋が用意できる。どっちでもいいが早く決めろ」

「じゃあ俺が個室でいいな」

「俺も個室がいいんだよ！」

「なんだ、一夏も実は女の子を部屋に呼びたいんだな。このむっつりスケベ」

「俺は部屋でくらいゆっくりしたいだけだ！」

まあ、一夏は学校では落ち着く暇がなかなかなさそうだからな。しょうがない。

「じゃんけんだな。ルールは特になし。一本勝負で恨みっこなしだ」

「いいぜ」

そして、互いにこぶしを構えると、

「じゃんけんっ」「」

と一夏はパーを出した。それはそれを確認し悠然と、

「チョキっと。はい、俺の勝ち」

「後出しだろ！」

「ルールは特になしといっただろ。後出しが禁止されているわけではない」

「し、師河くん。卑怯ですよ」

なにをいつてるんですか、山田先生。勝負の世界に卑怯もクソも

ない。負けたやつが悪いんだよ。

「はははっ、悪いな一夏。せいぜい、同室の女の子と仲良くするがいい」

「くっ、どうせなにいつても無駄だから諦めるよ。……わかりましたけど、今日は荷物の準備に帰っていいですか？」

「心配するな、私が手配しておいた。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」

うむ、見事に生活必需品しかないな。マンガやエロ本の一冊もないとは、かわいそうなやつめ。

「まあ、心配するなよ。俺が家からゲームでもマンガでもエロ本でも持ってきて貸してやるから」

「お前の分もあるぞ。玲子さんが準備してくれた」
なん……だと……。

「ちなみに、ゲームもマンガもない、お前が隠していたエロ本は私が直々に処分してやった。ありがたく思え」

「……千冬よ、俺がエロ本読むの気に入らないのはわかるが、健康な男子高校生だぞ。持っていたくらいでその処罰。さすがに泣くよ？」

「勝手に泣け。あと、織斑先生だ」

くそ、かわいくないやつめ。そんなのだから女の子からしか告白されないんだ。

「もういいな、いいなら早く寮へ帰れ。夕食は六時から七時だから遅れるなよ。あと、しばらく風呂は部屋のシャワーでがまんしろよ。いいな、師河」

なぜに俺に念を押す。まあ、わかるけどさ。

「なんでダメなんだ？」

「なんだ、一夏は女子と風呂に入りたいのか。やっぱ、男ならそうだよな」

「っ！？ ち、ちがうぞ。入りたくなんてないぞ」

「ええ、女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題

のような……」

そうか、一夏はやはり男好きだったのか。これからの付き合い方を考えないといけないな。

「距離を取るなっ。俺は普通に女の子が好きだよ！」

「バカなこといつてないで早く行け」

「バアンツ！ と出席簿。うむ、そろそろ潮時だろう。」

「わかったよ、一夏行こうぜ」

「ああ、なんかもう疲れたよ」

俺は山田先生から紙とキーを受け取り教室を出た。その時、一言。

「あとでな、千冬」

千冬にだけ聞こえるように、そうささやいた。

着いた部屋は、個室というだけあってあまり広くはなかった。それでも、家の部屋よりはよほど広いし、生活するには十分だろう。

「さてと、荷物は」

ベッドの脇に置かれていた、キャリーバックを開く。

中には、着替えと洗面道具。当面の生活資金の入った財布、その他雑貨があった。確かに、生きるためなら十分だが、少しは俺の潤いも考えて欲しいものだ。

「それでっ」と

着替えなどを取り出し、空になったバック。その中を少し探ると、隠しポケットが開いた。そこは、着替えなどが入っていたスペースよりも大きく、そちらがメインとさえ思える。

そして肝心の中身だ。

「これだけか」

入っていたのは鋼鉄のワイヤー、大小さまざまな大きさ形のナイフ、拳銃と予備の弾倉と分解されたアサルトライフルだ。あとは暗色のコートにおまけのなんやかんや。

さて、なんでこんな物騒なものがあるかというところ、お家柄だと思

つてくれればいい。詳しい説明は面倒だからパスだ。

まずは部屋の物色から。適当に部屋を漁ると案の定。

「大漁、いや大量か？」

出てきたのは、嚴重に隠された盗聴器と隠しカメラ。どうせ、男子でIS操縦者である俺を監視するために設置されたものだろう。まったく、俺のプライバシーを何だと思ってやがる。

「俺に話があるなら直接来い。かわいがってやるぞ、楯無」

この程度で俺を欺けるとは、甘く見られたものだ。あのバカのことだから、これもお見通しなのかもしれんが、まあいい。

次は、ウサギのイラストが描かれた自己主張が激しいものを手に取る。

「とりあえず死ね、バカウサギ」

あいつはこれでいいや。

それだけいうち、カメラと盗聴器をまとめて破壊する。あとで燃えないゴミの日を確認しなければ。

次は分解されたアサルトライフルの組み立てを始める。それを手際よくこなすと、次は拳銃だ。これも一度分解、その後に清掃をして組み立てた。

「うん、こんなもんだろ」

この作業を始めてもう十年近い。いい加減になれたものだ。がちゃ。とドアノブが回る音がした。

「俺だ、一夏だ！」

「なんだ、おどろかすなよ」

反射的に扉へと拳銃を向けると、そこにいたのは顔を引きつらせた一夏だった。

「おどろいたのは俺だ！」

「ノックをしないのが悪い。それに、俺は武装の整備中だったんだ。そんなところにくるほうが悪い」

実は、俺も無用心だったりする。自分の家の感覚で、カギをしないで整備を始めてしまった。あまり見られていいものではないから

な。

物騒な人物だと思われたら、女の子が部屋に来なくなってしまう。

「それ、どうしたんだよ？ 学校にも持ってきたのか？」

「まあな。許可は取っているから心配するな」

「そうか」

部屋にあつた勉強机、その椅子に座ると一息つく一夏。

「それで、どうしたんだよ」

「…… 筈と部屋が一緒だったんだ。それで、ちよつとな」

「どうせお前のことだから風呂上りにでも出くわしたんだろ」

「なんでわかるんだよ！？」

当たり前だろ、このラッキースケベめ。

「それで、どうだったんだ？」

「なにが？」

「どれくらい成長してた？ 胸の大きさとか」

「ばっ！？」

一夏が顔を赤くする。どうせ、見た光景を思い返しているのだから。

「なにいつてんだよ！」

「なにつて？ 男としては気になるだろう。昔は一緒に風呂なんかも入ったんだ。それがどれだけ成長したか知りたくはないのか？」

「何時の話をしてるんだ！」

確か、小学二年生くらいかな。あの時は男も女もなかったからな。「服の上から見た感じでは、かなり大きかっただろ。どうだった？」

「あ、え、うっ……」

言葉に詰まる一夏。くそ、一人だけの秘密にして夜のネタにでもするつもりか。幼馴染に対して、実にけしからん。俺にもその幸せを分けて欲しい。

「ここか、一夏！」

そこで本人登場。蹴破るような勢いで、木刀を持った筈が入ってきた。

「おい、人の部屋に入る時はノックをしる。集団生活なんだからマナーくらい守れよ」

「一夏、見つけたぞ！」

俺の言葉も許可も聞かず、勝手に部屋に入る幼馴染。

なんだろうな。六年振りに再会したかわいい女の幼馴染が部屋をたずねてきたというのに、まったく嬉しくない。

「ま、待て箒。俺が悪かった、謝る。だから許してくれ」

「問答無用」

「じゃねえだろ、バカ」

箒が振り下ろす木刀。それを片手で受け止めると、もう片方の手で箒の頭に手刀を入れる。

「落ち着け。照れ隠しだか怒ってるのか知らんが、仮にも剣士ならくだらない理由で剣振るうんじゃねえよ」

「し、しかし……」

「いい訳はいらない。少し反省しろ」

「……すまん、美鶴。感情的になりすぎたようだ」

しゅん、とうなだれる箒。つたく、落ち込むなら最初からやるなよ。

「で、理由はなんだ？ 風呂上がりの半裸姿を見たところまでは聞いたぞ。俺にも見せる。そしてそのけしからん胸を揉ませてくれ」

「だれが揉ませるか！ そのことはいい。あれは事故だ。だがな……」

…

ふむふむ、一夏が竹刀に引っかけた箒のブラを見た。その理由も偶然っぽいけどな。箒にも落ち度はあったっぽいし。それですわらず木刀を振ったら一夏に避けられた。それでまた振ったら一夏がまた避けたから意地になっってこうなったと。

まあ、そりゃ避けるだろ。当たったら痛いし。攻撃には反射的に避けるように仕込んだし。怒りで単純になった箒の太刀じゃかすりもしないだろう。

結論、

「くだらないことで喧嘩するな。とりあえず、お互い謝つとけ」

「そうだな。ごめん、箒」

「私も、すまなかつた。一夏」

こういう時、いつも仲裁するのは俺の役目だった。それが、今になっても同じ役とはな。いい加減、昔のまんまで嬉しくなるぜ。

「なに笑ってるんだ？」

「いや、何時までたつてもガキだなんて思ったんだよ」

「失礼なヤツだな。お前こそ、そうやって大人ぶるのは昔からだ。

それに、昼間のオルコットとのアレもそうだ。強い女を求めるのも、昔から少しも変わってない」

それはしょうがない。俺個人の好みの問題なのだ。強い女性と戦い、身を削り、互いを求め、その果てに愛し合う。いや、ずいぶん歪んだ恋愛感だな。

「まっ、それを含めて互いに積もる話もあるだろう。飯でも食べながら、昔話でもしようぜ」

「いいな、久しぶりの再会なんだ」

「ああ、そうだな」

それから俺たちは食堂で夕食を食べながら、思い出話や今までのこと、そしてこれからのことを思う存分話した。とても、充実した時間だったと思う。

そんなこんなで日も変わる頃。話は夕食後も続き、すっかり夜も深けてしまった。いい加減寝なくては明日に響く。のだが、

「いらっしやい、待ってたぜ」

深夜の来訪者。普段なら迷惑だと追い出すのだが、こいつは別だ。

「狭い部屋だけど、座れよ。千冬」

俺は織斑先生とは呼ばず、名前で呼んだ。それに、今回は怒ることもなく、

「それは、この部屋を用意した学園の教師である私への嫌味か、美鶴」

それは、プライベートの織原千冬だった。さすがに黒のスーツ姿ではなく白のジャージを着ているが、それがまた嫌にかっこいい。美人は何を着ても似合うね。

「冗談だ。で、話はなんだ？」

「話があるのはそっちだろ。この数ヶ月はドタバタで会えなかったんだ。なにか、いいたい事があるんじゃないか？」

「そのドタバタの原因の一人がなにいつてるんだ」

と呆れたように笑う。俺も同じく、笑った。

「酒はないが、コーラならあるぞ」

「もらおうか」

俺はグラスを二つ出すとコーラを注ぎ、一つを千冬に差し出す。

二人で並び、ベッドに腰掛ける。

「そうだな、なにかから話そうか。まずは、礼をいわせてくれ。一夏を預かってくれて、ありがとう」

それは、俺たちがISに乗れることがわかってからの数ヶ月、一夏が俺の家に住んでいたことをいつているのだろう。

「別に、いいさ。今までもよく泊まってたんだ。改めて礼をいわれるほどの事でもないだろ」

「それでも、さ。もし一夏が一人で家にいたら、なにがあるかわからなかった。それを守ってくれたのは美鶴と玲子さんだ。本当にありがとう」

確かに、一人で家にいたら記者や国の役員や研究者などのせいで落ち着く暇もないだろう。

「しかし、本当にブラコンだよな。一夏の心配ばっかで、俺はどうでもよかったのか」

「そ、そういうわけじゃない！ もちろん心配はした。だが、美鶴の強さはよくわかってるからで、一夏はまだ弱いからだな……」

俺の意地悪な言葉に、慌てて弁解する千冬。その姿は、昼間のき

りつとした雰囲気など少しもない。

その姿がかわいいので、俺は千冬の口を、自分の口で塞いだ。

「……」

「……」

互いに、しばしの沈黙。そして、口を離すと拗ねたように、

「不意打ちとは卑怯だぞ」

「千冬がかわいいからいけないんだろ。まっ、気にするな。千冬の弱さはわかってるからさ」

世間では最強などと呼ばれている千冬も、常に強いわけじゃない。弱さも、もちろんある。その一つが、一夏だ。一夏のこととなると過保護になるのは、それだけ大事に思ってるからだ。俺のことを想ってくれてるのもわかるが、やはり妬けてしまうのはしょうがない。少しの意地悪くらい許してもらおう。

「コホン」

顔を赤くした千冬が一息、気を取り直して話を再開する。

「それで、だ。美鶴、なぜ自分と一夏だけが男でありながらISに乗れるか、検討はつくか？」

「まあな。確証はないが、多分バカウサギのせいだろう」

「やはり、束か」

篠ノ乃束。ISの製作者で天才中の大天災。世界を自分と、大切な人物数人と、それ以外でしか考えられない異常者でもある。あと、俺の天敵。

その大切な数人の中になんということだろう、俺と一夏も含まれているらしい。それが、理由だろう。大体、ISのコアを書き換えられるなんて束しかいないだろう。

「なに考えてるんだ、束は」

「ただの暇つぶしの可能性もあるな。なんせ、部屋にカメラと盗聴器まで仕込んであったんだから」

「なに？」

「安心しろ。全部壊してある」

千冬のかわいい姿を束になんて見せてやるか。俺が独り占めするのだ。

ちなみに、一夏にはさつき妨害電波を出す装置を渡しておいた。筈はなんだかわかってないみたいだが、一夏はとりあえずわかっただろう。まあ、盗聴と監視される理由はわかってないだろうけど。体だけじゃなくて、頭も鍛えるべきだったかもしれない。

「そうか。あとは、少し文句がある」

「文句？」

「オルコットのことだ。ずいぶん、仲がよさそうだったが」

ああ、お嬢様のことが。ふぶん、妬きもちか。

「気になる？」

「別に、お前の浮気癖はわかってるし、私への気持ちも理解している。オルコットが、美鶴の好みかもしれないということもわかった。だが、それでも、あまり気分のいいものではないな」

少し悲しそうに笑う千冬。弱い千冬だ。

ああ、ダメだ。そんな顔するなよ、千冬。そんな顔見せられたら、我慢できないじゃないか

「え？」

俺は千冬を抱き寄せると、そのままベッドに押し倒した。

「な、なにするんだっ？」

「なにつて、男と女がすることなんて一つしかないだろう。それに、ここしばらく千冬と会えなかったから溜まってるんだよ。千冬だつてそうだろう」

「しかし、今の私と美鶴は教師と生徒で……」

といい訳をする千冬の口を、また自分の口で塞ぐ。先ほどよりも長く、深く、攻めるように口付けを交わす。

「さて、嫌とはいわせないぞ。いうんだったら、そのたびに口を塞ぐ」となる

「……やっぱり、卑怯だ」

「何とでも。それで、どうする？」

千冬は恥ずかしそうに顔を赤くし、悔しそうに顔を背けると、首を小さく縦に振った。

そうして、高校生活一日目は過ぎていった。

変わらない者たち（後書き）

これってR-15にしたほうがいいのでしょうか？
誤字脱字あれば報告お願いします

それぞれの戦い（前書き）

なんだか、このままいくと鈴だけあんまり変わらないことになりそうです

さてどうしよう

それぞれの戦い

「寮っていいな。準備しなくても食事が出てくるんだから」
「そうだな」

高校生活二日目。

俺と一夏。箸は朝食を食べに食堂へと来ていた。世界中から生徒が通っているだけあり、メニューも国際色豊かなこの学校。
俺はとりあえず、洋食セットを頼むことにした。

「いいよな、このスクランブルエッグ。ふわふわのとろとろだ」

「こつちの米も食ってみるよ。かまどで炊いたみたいだぜ」

二人して、楽しんで食事にありつける幸せをかみ締める。

「そんなに嬉しいのか？」

「まあな。朝の時間は数分でもすごい貴重だ。仕事が少ないほどありがたい」

一夏は半分一人暮らしみたいなものだし、家事は必然的に自分で行うことになる。俺は、味覚音痴の母親の影響で食事だけは家族のものを用意している。

「織斑くん、隣いいかな？」

数名の女性とが、盆を持って声をかけてきた。

「もちろん、隣にどうぞ」

一夏ではなく俺が答える。

「やった、ありがとう」

「いえいえ、俺のは女性からのお願いは断らないんで」

「……出たよ、美鶴の八方美人」

呆れたように俺を見る一夏と箸。

失礼なヤツだ。第一、一夏にだけはいわれたくないな。

「あれ、師河くんと織斑くんって知り合いなの」

「まあな。箸もそうだけど、幼馴染なんだ」

女性の楽しく談笑を始める俺と一夏。それに比例して、箸が不機

嫌になつていく。

わかりやすい。そしてヘタレだな、筭。もつと積極的にいかない
と一夏はわからないぞ。

「へえ、師河くんって昔からこんな感じなんだ」

「そうなんだ、しょっちゅうナンパに付き合わされてさ。こっちは
たまつたもんじゃないよ」

「ナンパとは失礼な。ただ町に出かけて、美しい女性がいたら声を
かけてるだけだろ」

と、俺たちは話す。だが、

「でもさ、師河くんって本当はあんまり本気じゃないよね？」

「なにが？」

「女の子へのアプローチ」

……へえ、なかなか鋭いこというな。少し話ただけでそのこと
がわかるとは、おもしろい子だ。

「なにいつてるのよ、今時珍しいくらいの肉食系じゃない」

「そうかな」

「そうだよ、ねえ？」

さて、どう返事をしようか。

「そうだね。それは、自分で確かめてみたらどうかね」

俺は席を立つと、先ほどの言葉を発した女性とに近寄り顔を寄せ
る。

きぐるみのようなパジャマを着た女子だ。

「名前、聞いてもいいかな」

「布仏本音だよ」

ああ、なるほど。布仏の人間か。盗聴器壊した腹いせか何か知ら
ないが、やってくれるな、楯無。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻した
らグラウンド十週させるぞ！」

食堂に千冬の声が響く。時間切れのようだ。

「残念、今回はここまで。また、次の機会にしよう」

俺は顔を離すと、顔を赤くしている一夏たちを無視して席に戻ると食事を再開する。

グラウンド十週は嫌だからな。

授業は相変わらず退屈だった。なにせ、兵器や武器についての知識を学ぶことは俺のライフワークのようなもので、特に最強の兵器であるISについてなど、俺に教えられるものは千冬と同程度あると自負している。なので、授業中はもっぱら山田先生の胸を見ることに従事している。うん、大きいな。

それに比べて一夏はグロッキー状態。あの分では、新しくもらった参考書もほとんど読んでないのだろう。

そんなこんなで休み時間。地獄のような苦痛から開放される貴重な時間だ。

一夏の席に向かうと、昨日のように机に座る。

「お疲れ」

「……ああ」

返事が小さい。死にかけのようだ。

「美鶴、さっきの授業、山田先生は何語を話してたんだ？」

「主に日本語。専門用語は英語も混じってるな」

「そうか……」

そして、机に突っ伏す一夏。

そんな一夏を気にすることもなく、今日も今日とて女子が俺たちの周りに集まってくる。

マシンガンのように出される質問に、困惑顔の一夏。俺は適当に答えていく。

「ねえ、千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな……」

「バアン！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

一夏の言葉は、千冬によって止められた。

都合の悪いことは口封じか。やれやれ、大人って汚いな。

「何かいいいた気だな」

「なにもありませんよ、織斑センセ」

別に、ベッドの上での千冬の姿をバラそうなんて考えてませんよ。十八禁な上に、人に教えるにはもったいない。

「まあいい。ところで織斑、お前のISの準備だが時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「????？」

意味がわかってない一夏。これくらいわかってくれよ。

しかし、専用機か。国も大きく出たな。世界で二人しかいない男性操縦者を手元に置いておきたいってことか。

千冬に教科書の音読を命じられた一夏は、やっと状況が飲み込めたようだ。

バカウサギの気まぐれのせいで、現在ISコアは467しかない。一つの国が保有する数は、あたりまえだがそれよりもさらに少数だ。その貴重な一つを、一夏のために使おうというのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者な
んですか」

話の中にバカウサギのことがあったせいか、聡い生徒が聞いてきた。まあ、珍しい苗字だしいずれはバレると思っただけだが、早かったな。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。」

あっさりバラす千冬。それに、教室が沸き立つ。クラスに有名人の身内が二人もいたのだ。無理もない。しかし、

「あの人は関係ない!!」

箒は大声を上げた。バカウサギの話は、箒にとって地雷みたいなものだからな。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

さてさて、空気が悪くなったな。しょうがない、助け舟でも出するか。

「織斑センセ。俺には専用機ないの？」

「ない。IS一つ作るのにどれだけの資金と時間が必要だと思ってる。コアも、そういくつも都合できるものじゃない。故に、今回は先着順で織斑のISだけが作られることになった。試合の日には学園の訓練機を準備してやる。安心しろ」

世間的には、一人目が一夏。二人目が俺ということになっているからだな。しかし、本音は別のところにある気がする。もっと政治的な、軍とか他国とかが絡むような……。有名人を身内に持つと大変だということだな。

「お互いががんばろうぜ、一夏」

「突然なんだよ？」

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

俺は訳がわからないという顔の一夏を無視して席に戻る。

しかし、一夏に専用機か。俺の対戦相手はお嬢様だと思っていたが、思ったより楽しめるかもな。

「安心しましたわ」

「何が？」

昼休み。俺はお嬢様に誘われて屋上で昼食を取っていた。

ちなみに二人だけ。一夏は箸と食堂に行った。二人だけにしてやったのだ。少しはがんばれよ、箸。

「織斑さんの専用機のことです。さすがに訓練機に乗った素人では勝負になりませんもの」

一見、相手を見下したような発言だが、すべて事実だ。代表候補

生であるお嬢様は専用機持ちで、ISの操縦時間も数百時間になっているだろう。

それに対して、一夏は入学試験の時わずかにISを操縦しただけだ。まぐれで山田先生に勝ったようだが、そんなもの考慮するには値しない。どんな兵器でも、十全に扱うにはそれ相応の時間が必要なのだ。

「ま、そうだな。俺もそのほうが少しは楽しめる」

「安心してください。私が織斑さんを下し、美鶴さんを心より満足させて見せますわ。それこそ、織斑先生以上に」

あれ、千冬の話がここで出てくるのか？

「わたくしも女です。想い人の心が、どなたを向いているかくらいわかりますわ。もちろん、だからといって諦めたりしませんけど」

「まさかお嬢様からそのような言葉が聞けるとは、光栄です」

かわいく笑うお嬢様に、俺は軽く答える。やれやれ、たくましくなったものだ。

「それで、美鶴さんはどうしますの？ 訓練機を借りるおつもりですか？」

「いや、借りない。訓練機でも専用機でも、いきなり乗った俺がお嬢様に勝てるとは思えない」

ISに圧倒的な能力があるか、お嬢様に油断があるかしないと勝利は難しいだろう。打鉄に乗った俺がお嬢様に挑んでも、勝率はかなり低い。せめてもう少し訓練ができれば、ものにはなるのだろうが。これもまた、覆らない事実だ。

実際、試験の日に対戦した千冬とは五分しか持たなかった。ISに乗った千冬が化け物なのはわかってはいるが、五分しか戦えなかったのは無念だ。

くそ、生身同士なら負けないのにな。

「じゃあ、どうしますの？」

策はある。対抗手段も考えてはある。しかしそれは、詰まるところ、

「ただ、いつもの俺の戦いをするだけさ」
それだけの話だ。

「そうですか。それは、私も全力でいかなければなりませんわ」
そう笑うお嬢様は、楽しそうだった。とても楽しそうな、戦士の顔だった。

「さて、物騒な話は終わりだ。食事にしようぜ」

「そうですね。わたくし、お弁当を作って参りましたの」

そういって、お嬢様は二人分のランチボックスを取り出した。

「準備がいいね」

「当然です。これも、美鶴さんをわたくしに惚れさせる戦いの一つですから」

自信満々にランチボックスの蓋を開けると、そこには色鮮やかなサンドイッチが詰まっていた。

「うまそうだな。いただきよ」

一つ取って口に入れる。さて、そのお味は。

「……」

「どうでしょう？」

期待に満ちた眼差しのセシリア。

「……これ、味見たか？」

「いえ、してませんけど」

それがなにか、とお嬢様はいった。

なにか、じゃねよ。お嬢様のサンドイッチの味。それはすさまじかった。

甘いようすっぱいようなしょっぱいような。まるでお袋の作った料理のようだ。見た目がよかっただけに、なお悪い。

「試しに食べてみる」

俺の食べかけも、お嬢様の口に入れる。最初こそ、間接キスだと気づいたのか顔を赤くしていたが、すぐに青ざめてくる。

「感想は」

「……これも、わたくしが乗り越えるべき戦いですわ」

「勝てるのを期待してるよ」

と、もう一つサンドイッチを口に入れる。やはり、すさまじい味だ。

「美鶴さん、無理はしなくていいですわ」

「これ食わないと、俺は午後の授業を空腹で過ごすことになるんだよ。この程度ならお袋の料理でなれてる」

それに、女が俺のために飯を作ってきたんだ。それを残すわけにはいかないだろう。

「……ありがとうございます。大好きですわ、美鶴さん」

お嬢様はそう、優しく微笑んだ。

不覚にも、かわいいと思ったのは黙っておこう。

それぞれの戦い（後書き）

とりあえず一巻完結を目指します

戦う意味(前書き)

鈴は一夏と美鶴のどちらのヒロインにしようか迷い中。どっちでもいいんだけど、バランス的に一夏かな？

戦う意味

「やつほー、お元気？ 美鶴だけど、今大丈夫？」

『……今から寝るところだったんだけど』

電話の向こうから聞こえてきたのは、かわいらしい女の子の声。その声には、そこはかたなくダルさが感じられた。

「あれ？ 時差を考えてもまだ昼間だろ？」

『徹夜で作業してたんだよ。こつちも社運がかかってきて、今は忙しいんだ。会社はどうでもいいけど、潰れるとISの整備なんかが大変なんだよ』

「そうか、それは大変だな。で、お願いがあるんだけど」

『僕の話聞いてた？ 今すごい忙しいんだけど』

「そうか、がんばれ。でだ、ちょっと準備してもらいたいものがあるんだけど」

『僕の話、まったく聞いてないんだね』

「聞いて欲しいのか？ ベッドの上でならいつでも聞くぞ」

『じゃあ、対価はそれでいいよ。僕も近々日本に行くことになるから、その時は優しくしてね』

「ああ、存分にな」

必要な物のリストはメールで送る、と伝え電話を切った。

「というわけで、女の子と寝ることになった。もちろん、エロい意味でな」

「なんでだよ！」

夕飯時の食堂。俺にとっては昼以来の食事だが、どれほど待ち望んだことか、まともな食事を。ああ、白米がうまい。味噌汁のダシがきいている。ビバ、日本食。

「お、お前は！ 何か必要なものがあるからと電話したのではないのか！」

「そうだよ。楽しい食事の前に、やることはやっておきたかったか

らな」

「それがなぜ、セツ……っ！」

「セツ？ ああ、セツクスか。おい、食事中だぞ。せっかく俺が表現を和らげてやったというのに。もう少しTPOをわきまえろよ、
箒」

顔を真っ赤にする箒に、俺は呆れた。こういうマナーにはうるさいヤツだと思っただが。一夏と再会したせいでおかしくなってきたのか？

「う、うるさい！」

「それより俺としては恋人がいるのに、そう軽々と他の女生徒関係持つのはどうかと思うんだが。弟としては怒るところだぞ、これ」
千冬が彼女か、どうも違和感がある。千冬との関係はそう簡単にいい切れるものではないからな。運命以上宿命以下みたいな。

「あいわからずシスコンだな。心配するな、俺の千冬への愛は揺らぐことはない」

「まあ、そうだろうな」

一夏は苦笑しながら、お茶をすする。なんだかんだで、一夏は俺と千冬のことを理解してくれてるからな。自分でも歪んでると思っただけだ。こういう理解者はありがたい。

「こ、コホン。それでだな、いったいどこに電話してたのだ？」

気を取り直し、改めて箒がたずねてくる。まだ顔が赤いぞ。

「我が家御用達の武器会社。まあ、正確にはその支社みたいなものだけだ。で、そこに彼女がいるからさ。月曜のために武器を都合してもらおうと思っただけ」

「武器って、IS用の」

「まあな」

へえ、と一夏と箒は返事をした。まあ多分、本当の意味をわかってないな。

「しかし、お前はどれだけ女と関係を持ってるんだ。男として、一人の女性を一途に思うべきではないか」

「世界の歴史を遡れば、側室がいた偉人なんていくらでもいるだろう。それに、俺だって誰でもいいわけじゃない。ある程度の線引きはしてるさ」

これは本当。今まで俺が望んで関係を持ったのは二人。ビジネス上の都合で一人。半ば襲われる形で一人だけだ。

「それより、そっちはどうなんだ。勝算はあるのか？」

「ああ、箒にISについて色々教えてもらおうと思ったんだけどさ」

「一週間程度の付け焼刃では無理だ。なので、剣一本に絞る」

つまり、だ。物覚えの悪い一夏ではISの知識を少し覚えただけでは何の役にも立たない。なので剣を交え一夏もモチベーションを高め、できあがったところをお嬢様にぶつけるというわけだ。

しかし、さすが姉弟。昔、千冬がしていた調整方法と同じだ。ISの大きな試合の前は俺が相手になったものだ。昼は剣と銃弾を交わし、夜はベッドで互いをむさぼり合う。そして死んだように眠り、また戦う。いやはや、充実した日々だったな。

「まあ、悪くないな」

一夏は頭ではなく体で覚えるタイプだ。せめて、お嬢様の機体データや戦闘データがあれば何とかなるのだろうが、新学期始まって早々では満足にあるとも思えない。しかも、お嬢様だつて日々成長しているだろう。なら、そんなデータなどに頼ってない知恵絞るよりは、自分を高めることに集中したほうがいい。

「で、どうだった？ 手合わせした感想は」

箒は全国大会で優勝する程度の実力だったな。それだと、一夏の方が幾分か上だと思うが。

「最初は俺が優勢だったんだけどさ」

「最後のほうは私も何本かあったぞ。相手をしている私が不甲斐ない」と、一夏の訓練にならないからな

俺の予想が外れたな。昨日の一件、箒は一夏が絡むと周りが見えなくなるところからなにか問題を起こすと思ったが、そうでもなかったか。

「なんなら、明日から見学に来るか？」

「いや、お楽しみは取っておくよ」

それに、俺もやることあるからな。

考えるのは、六年ぶりに再会した幼馴染二人のこと。

一人は、織斑一夏。私が、その、こ、恋をしている少年だ。出会いは小学一年生の時。それからずっと、恋をしてきた。その想いは離れていても色褪せることはなく、再会してからはさらに強くなっただけだ。

強く、かつこい。そんな、大好きな少年だ。

もう一人は、師河美鶴。美鶴との出会いは、一夏よりもかなり後。その出会いは最悪で、最初は彼に対して嫌悪と恐怖しか持っていなかった。しかしそれも、最初だけ。同学年ではあるが、それは中学で一年留年したためらしく、本来は私と一夏よりも一つ年上の彼。美鶴は、難がある性格をしているが、厳しくも優しくもあり、それでも私たちにとっては兄のような存在になった。

それは、六年がたった今でも変わっていない。

高校生活初日に、私が感情に任せて振るった木刀を受け止めた彼がいった言葉。それは、私に対して確かな変化をもたらした。

それを感じたのが、今日の一夏との訓練だ。

恥ずかしながら、その時、私は浮かれていた。一夏と同じ時間を過ごせることに、一夏が私を頼ってくれていることに浮かれていた。そんな私を、一夏はあっさりと負かした。仮にも、剣道で全国大会で優勝をした私が、あっさりと負けたのだ。

一夏は美鶴に手解きを受けていたと聞いていたが、それでも、私は簡単に負けすぎた。

最初は、その事実が受け入れられなかった、だが、数度も剣を合

わせる内にすぐわかった。

一夏は、私のことしか見ていない。ただまっすぐに、相手である私だけを見て、精神を研ぎ澄まし、剣を振るってきた。

まるで、愛しい相手だけを求めるように、剣を振るってきたのだ。それはかつて見た、ただ互いを求めて戦う美鶴や千冬さんたちのようだった。まさしく、戦う者の姿だった。

その一夏の姿勢が嬉しく、また恥ずかしくもあった。一夏は純粋に私を求めてくれているのに、私はなんて汚れているのだろう。

怒りに任せ剣を振り、その場をごまかす為に剣を振り、浮かれた気持ちで剣を振るう。昨日、剣が一夏にかすりもしなかったのも、今日もまた勝てないのも当然だ。

私が同じ場所で立ち止まっている六年間で、想い人はずいぶんと先に行ってしまったようだ。

とても情けなかった。ひたすらに情けなかった。私を頼ってくれた一夏に、こんな醜態を晒すのが情けなかった。成長していない私が情けなかった。なによりも、弱い私が情けなかった。

汚れていて、情けなくて、醜悪で、弱い。だからこそ、私はこうも思った。

強くなりたい。

一夏のように、セシリアのように、千冬さんのように、美鶴のように、強くなりたい。

そう想った瞬間、今まであった心の靄がなくなった気がした。別に、一夏に対する思いや、複雑な嫉妬がなくなっただけではない。

それでも、剣を持ち一夏に対峙している間だけは、そんな不純な気持ちなどは一切ない。ただ目の前の一夏だけを、剣を振るう相手だけを見ていた。

その後は、やはり私が終始不利ではあったものの、何本が一夏から取れるようになった。

互いに剣を振り、技を競い、ひたすらに戦った時間は、この数年間味わったことがないほど充実していた。

だから、私は思う。今から、始めよう。篠ノ之箒の戦いを。一夏への想いも、剣の腕も、ISの操縦も、姉さんとの関係も、すべて戦い乗り越えよう。

私の自慢の、二人の幼馴染に負けない。いや、勝てるように戦おう。

「頼もつ」

授業も終わりそうそう、一夏と箒は訓練のため剣道場へと向かった。箒がやけにやる気だったのが印象的だ。それも空回っている感じではなく、とても充実しているような気だ。昨日もそうだったが、心境の変化でもあったのだろうか？

お嬢様もそうそう教室を後にした。昼休みに強烈な味のおにぎりを食べながら聞いた話では、アリーナを借りて鍛錬をしているらしい。

そして俺だが、対戦相手の二人が鍛錬をしているというのに、一人のんびり胡坐をかいているほど俺は慢心などしない。むしろ、今回の戦いは専用機を持たない俺が一番不利とさえ思っているほどだ。なので俺も鍛錬をしようと思うのだが、相手がいない。一人でしようとも考えたが、ここ最近は戦闘をしていないので、どうせなら一夏たちのように対人でやり勘を戻したい。だが、俺と互角で戦えるものなど早々いるものではない。一番の理想は千冬なのだが、さすがに教師の仕事があるとのことで断られた。そうになると、次善の手はこの学園最強の生徒となるわけだ。

「やあ、美鶴くん。生徒会になにか御用かな？ 悩める生徒の相談なら、どんなことでも聞くよ」

そう扇子を広げいやらしい笑みを浮かべるのは、更識楯無。この学園の生徒会長で、IS学園最強の肩書きを持つ女。ついでに、俺

とは旧知の仲。

「そうかい。じゃあ文句でも一つ。部屋にプライベートを無視して盗聴器や監視カメラを仕掛けるバカがいるんだがどう思う？」

「そんな迷惑なヤツがいるのかい。それは忌々しき事態だ。そう思うだろ、虚？」

「そうですね、お嬢様」

楯無の言葉に、苦笑しながら答える眼鏡で三つ編みの女生徒。

「はっ、どこで会ってもかわらないな。同じクラスの本音、あれは虚の妹だな」

「そうだよ。私からの入学祝と挨拶は気に入ってくれたかな？」

「ああ、嬉しくて涙が出そうだ。だから、今日はそのお返しに来たぜ」

俺と楯無は、共に笑顔を浮かべる。少なくとも俺は、友好的に笑っているつもりはない。

「それはありがとう。ところで、小耳に挟んだんだが、来週の月曜にクラス代表を決める決闘を行うそうだね」

「さすが、学園内でのことは何でも知ってるな。更識の名は伊達じゃないってか」

「師河の御子息に褒められるとは、私も鼻が高いよ。それで、今日の用事はそれが関係してると思うんだが、違うかい？」

「俺はただの不良息子だよ。それより、いっちょバトロうぜ」
「まったく。俺は両親ほど立派な人間じゃないよ。それどころか、

いつも心配ばかりさせている不出来な子供さ。それよりも、本題と行こうじゃないか」

「やっぱりそれか。どうせ、そんなところだろうと思ったよ。私を調整相手に選ぶなんて、まったく、君くらいのものさ」

「断るってのか？ 校内ではいつでも襲って来いとかふれ回ってるのに、俺はダメなのかよ。それとも、女尊男卑の今は男なんか構ってやれないとかいうのか」

「まさか、私は生徒会長だ。学園の生徒を差別なんかしないさ。そ

れに、美鶴くんに襲われるなら、それもまた悪くない」

「そうか、よっ」

俺は袖に隠していたナイフを取り出すと、楯無に投擲した。それが、開戦の合図だった。

「まったく、美鶴くんはせっかちな」

それをいつの間にか手に持っていた鉄扇でな難なく弾くと、俺の意識の隙間を縫うように接近する。

「だけど、嫌いじゃない」

振るわれる鉄扇。それを今度は腰から引き抜いたりボルバー型拳銃で払うと、もう片方の手で拳を繰り出す。それを半身で避けた楯無は俺から距離を取った。

「まったく、物騒なものを出したね。それは人に向けて撃つものじゃないな。当たれば人間は即死だよ？」

「訓練弾だから心配ない、当たっても骨が砕ける程度だ。それに、遠慮なく頸動脈狙ってくるヤツにいわれたくないな」

「それは美鶴くんを信じての行動だよ。あれくらいじゃ、君を倒せない。女性にこれほど信を置かれているんだ、喜びたまえ」

「ああ、まったくだ。その調子で、思う存分かわいがってやるうか」「それは楽しみだね。……虚、下がってなさい」

「はい、お嬢様」

それを皮切りに、俺は引き金を引き、楯無は鉄扇を振るった。その日の戦いは、日が暮れるまで続けられた。

最後に、この戦いはお互いが本気ではなかったため決着がつかず、決闘の日まで毎日行われた。そのたびに生徒会室を始め学校中の備品を破壊することになるので、同じく毎日のように反省文を書かされたのは秘密だ。

そして月曜日。待ちに待った決闘の日がやってきた

戦う意味(後書き)

次の一話で一夏対セシリア

その次に勝者対美鶴ですね

箒と楯無はこんなキャラでよかったか？

感想、ご意見お待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3918x/>

IS-戦いを求めるもの

2011年10月19日06時23分発行